クリエイティブ人材を育む「動物かんきょう会議」メソッドの実証研究

—Animal SDGs（動物が語る SDGs） 三鷹モデルの開発と三鷹市での実践—

イアン　筒井

本研究の目的はクリエイティブな人材を育むために発案された「動物かんきょう会議メソッド」を三鷹市にローカライズして再現することである。2018 年から山口県宇部市で実施されている「せかい！動物かんきょう会議 in SDGs 未来都市 UBE」のノウハウを「宇部モデル」とし、三鷹市のリソースを活かして行う「三鷹モデル」の比較実証をとおして新たなノウハウや汎用性等の可能性を検証した。このメソッドは、動物園・水族館などを活用する対話型アクティビティで、地域のリソース（市民・行政・大学等教育機関・企業など）と有機的に連携することで地域活性化やまちづくりの相乗効果を促す。新型コロナウイルス感染症の影響を受け本研究期間では動物園での再現には至っていないが、「三鷹モデル」の現在までの取り組みについて、地域リソースとの連携、テーマ設定やコンテンツ制作、コンセプトブック刊行などの進捗から再現による発展と深化を確認できた。さらに、汎用的な再現実施の軸が「人づくり」とコンセプトの共有にあり、各地のリソースと個性が活かされ合う効果が生じることがわかった。

キーワード：クリエイティブ 地球環境　対話 地域リソース 動物園

1　はじめに

1.1　目的と背景

人工知能（AI）の活用が一般化する時代、AI が得意なことは AI にまかせて、これからを生きる世代が手に入れるべき能力は「クリエイティブ（主体的に考え、自発的に行動できる力）」だと言われる。本研究のテーマは、自己肯定感の高いクリエイティブな人材を育むために発案された「動物かんきょう会議メソッド」を三鷹市にローカライズして実施し、その意義や可能性を考察することである。「動物かんきょう会議」は 1997 年に筆者が主宰するプロジェクトとして始まり、絵本やアニメーションシリーズ、環境学習プログラムとしての実践の積み重ねにより開発された対話型メソッドである。2018 年から山口県宇部市で採用され「せかい！ 動物かんきょう会議 in SDGs 未来都市 UBE」として実施されている。この宇部市での取り組みのノウハウを先行事例の「宇部モデル」とし、三鷹市のリソースを活かした「三鷹モデル」として再現実証していこうと考えている。

メソッドの中心となるのは「動物になって考えてみる」ことである。環境問題だらけの地球で被害を受けているさまざまな動物にポジションチェンジして人間の活動を見てみたり、再び人間に戻って考えたりする対話型アクティビティによって、新たな着眼や閃きが生まれ、動物と人間、自己と他者の関係性に気づくことができる。地球環境や動物たちと未来を共に生きていくためには、人間社会を持続可能なものに変えていくクリエイティブな力が必要だ。これからの社会をつくる世代が新たな気づきを得て主体的でクリエイティブになることがこのメソッドの目的である。「動物かんきょう会議」は、地方都市の構成要素である「動物園・水族館」を活用して対話型アクティビティを行い、地域のリソース（市民・行政・大学

等教育機関・企業など）との有機的な連携によって運営されるようプロデュースしていくものである。まちづくりや地域活性化とも関連が深いため、地域に根ざしたオリジナルな連携による「三鷹モデル」を実現して、関係者全員が相乗効果によって進化していけるような展開を目指したいと考えている。

1.2　リサーチクエスチョン

2020 年 4 月にこの研究に取りかかったとき、筆者は三鷹版の「動物かんきょう会議」開催の成果によって「三鷹モデル」を検証しようと考えていた。しかし、新型コロナウイルス感染症のパンデミックが長期化し、連携を想定していた動物園・水族館が休園し再開見通しが立たない状況のため、当初考えたようなアクティビティ実施はできなくなった。

しかし、この 2 年間に、

① 非対面型の「インストラクター養成講座」実施による人材育成
② コンセプトブック「Animal SDGs／動物が語る SDGs」の企画編集、デザイン、刊行
③ オリジナル教材（人形劇動画）「南米アマゾンの森と家畜たち」の制作
④ 実証実験としての公開講座（ワークショップ)「Animal SDGs　第 1 回三鷹！動物かんきょう会議～南米アマゾンの森と家畜たち～」（会場：三鷹ネットワーク大学）の実施を行うことができた。また、宇部市ではコロナ禍に対応するリモート中継による国際交流「せかい！動物かんきょう会議」（日本・タイ・モンゴルの子どもたちがつながるライブ対話）を開催し、新たなノウハウを得ることができた。

したがって、本稿では「三鷹モデル」のこの間の取り組みの実績を踏まえ次の 3 点について論じていく。

(1)「動物かんきょう会議メソッド」のコンセプトや具体的な進め方を分析し、「宇部モデル」および「三鷹モデル」でどのようにローカライズされているかを検証する。
(2) 先行事例となる「宇部モデル」の 4 年間の取り組みからノウハウを抽出し、三鷹市のリソースを活かした「三鷹モデル」としてローカライズして再現実証することを通してその有効性を検証するとともに、汎用的なノウハウについて考察する。
(3) その中で、「動物かんきょう会議」プロジェクトから生まれたコンセプト「Animal SDGs」をベースにした教育サービスプラットホームの可能性についても考察していく。2022 年度以降、本稿の考察を踏まえて「三鷹モデル」等の新たな展開を示していきたいと考えている。

1.3　本稿の全体構成

以下、第 2 章では「動物かんきょう会議メソッド」について、その理念や手法などを明らかにして三鷹市で実施する意義を確認する。第 3 章では山口県宇部市で SDGs 未来都市推進事業の一環として行われる取り組み「宇部モデル」について先行事例として分析する。4 年間の経緯をたどりながら、地域リソースとの連携、定着の理由などを明らかにしていく。第 4 章では「三鷹モデル」の現在までの取り組みについて、地域リソースとの連携によるテーマ設定やコンテンツの進展をたどり、再現による深化を確認する。第 5 章では「宇部モデル」定着の理由の分析枠組みによって「三鷹モデル」の取り組みを比較検討するとともに、Animal SDGs のビジョンを示し、全体の考察をまとめる。第 6 章では今後のプロジェクトのあるべき姿を展望した。

2 「動物かんきょう会議メソッド」とは

本章では「動物かんきょう会議メソッド」の考え方や手法をさまざまな角度から検証しながら、「対話の場」で何が起こるか、「クリエイティブ」とはどういうことか、等を考察する。

2.1　「閃き」はいかにして生まれるのか

私は学生時代に読んだ小説「罪と罰」（作：ドストエフスキー）のあるシーンに強い衝撃を受け、その「問い」は今なお印象深く心に刺さっている。それは、主人公ラスコーリーニコフの友人のラズミーヒンが語る次の台詞である。

> デタラメって奴は、全ての生物体に対する人間の唯一の特権です。デタラメを言っているうちに真理に到達するんです。前に十四遍、あるいは百十四遍くらいデタラメを言わなきゃ、一つの真理に到達したものはない。これは一種の名誉なんです。ところで、僕らはデタラメを言うことだって自分の知恵じゃできないんです。まあ、ひとつデタラメを言ってみるがいい。自分一流のデタラメを言ってみるがいい。そしたら僕はそいつに接吻してやる。自分一流のデタラメってやつは、人真似で一つ覚えの真理を語るより全くましなくらいです。（訳：米川正夫）

私は「自分一流のデタラメを言ってみるがいい」という挑発をうけたのだ。自分一流のデタラメを言えることは人間としての特権だとも。当時、私は次のように解釈した。デタラメとは、人間だからこそできる「閃き」体験。そして、デタラメを言いつづけて、探求しつづけることで味わえる感覚、発見や発明につながる「喜び」体験。そのような体験を繰り返すことで自分自身を「クリエイティブ」にしていけるのだと。

今、私たちは気候変動、環境問題、貧困、格差、ジェンダーなどの課題が山積している時代を生きている。2015 年の国連サミットで SDGs（持続可能な開発目標）は採択され、国連加盟 193 カ国が 2016 年から 2030 年の 15 年間で達成するための 17 のゴールを掲げた。しかしその後、コロナパンデミック、米中覇権競争、欧米・ロシアとのイデオロギー対立、ウクライナ戦争などなど、ますます混沌とした状況を目の当たりにしている。

私は「デザイン思考」[1)]を促していくであろう SDGs ムーブメントにとても期待している。しかし、「地球は人間だけのものじゃない」という視点で「持続可能な開発目標」（SDGs）を問い直す必要があると考えている。後述するコンセプトブック「Animal SDGs」（イアン・益田 2021）では、次のように問いかけている。「こんな環境問題だらけの地球にしたのは人間たちだから……。人間の大人たちだけからの学びで本当にいいのだろうか？ むしろ、人間からたくさんの被害を受け続けている動物たちと対話することが大切ではないだろうか？」

サステナブルを考えるとき、1970 年代以降の人類の活動にはたくさんの成果もあったがたくさんの過ちもあったことを知ること。また大人たちは未来を生きる子どもたちに不都合なことを隠さずに伝えること、次世代の子どもたちと正直に対話することなしには、根本的に持続可能な世界をデザイン構築することなどできない。

「閃き」は、批判的精神をもって対象と向き合い、共感したり、疑問をもったり、探究しつづけていく中で発生する。さまざまな感情が過去の経験や体験を刺激し、自分自身の内面から沸き起こる衝動のようなものである。その意味においても「動物になって考える」ことは、批判的精神をもって人間活動そのものを俯瞰することであり、さまざまな閃きを創出するに違いないと考えたのだ。

2.2　「動物かんきょう会議メソッド」の手法

2.2.1　メソッド化の経緯

あらためて、「動物かんきょう会議」メソッドとは何かについて説明する。1997 年、地球温暖化防止京都会議 COP3 を契機としている。人類の存亡にもかかわる環境問題に対してさえ利権争いに終始する人間（大人）たちにはまかせちゃいられない！と動物たち（動物キャラクター）（図 1）が集まり、「動物には国境はない。そのような視点で地球をもっと見てみよう」とカンカンガクガクと話し合う絵本シリーズ（全 8 話）からはじまった。

その後、2010 年、生物多様性名古屋会議 COP10

図１　動物かんきょう会議に集まる動物キャラクター

の開催をきっかけに、NHK 教育 TV のアニメーションシリーズ（1 話 5 分、全 20 話）となる。小・中学校の総合学習の時間で、5 分間の問題提起型アニメを視聴した生徒たちが、残りの時間で白熱会議をするアクティブラーニングでの使用が想定されている。その後　2015 年、環境省の第 2 回 ESD 環境学習モデルプログラムで上位採択されたことをきっかけに、日本と世界の子どもたちが、動物キャラクターになって（擬動物化）創発する「せかい！動物かんきょう会議」プログラムづくりがはじまった。日本と世界の小学生～大学生、留学生、社会人などのべ 3,000 名以上が参加し、対話を重ねていく中でプログラムはメソッド化されていく。2017 年、第 11 回キッズデザイン賞優秀賞「消費者担当大臣賞」受賞をきっかけに、山口県宇部市とのプロジェクトがはじまった。学校と動物園をフィールドにしたプログラムへとパッケージ化されていく。2021 年にはコンセプトブック「Animal SDGs」刊行している（図 2）。

図２　動物かんきょう会議プロジェクトのあゆみ

2.2.2 「閃き」を促すシナリオ

動物かんきょう会議メソッドは、具体的には次にようなシナリオで会議を進行する。本ワークは事前準備や予備知識がない状態からスタートすることを良しとしている。つまり、非日常な場や状況をつくりだすことから体験をスタートさせている。次の例は、ジュニア世代の子どもたちを対象とした動物かんきょう会議の最初のワークの基本形である。

ワークの進行

［起：DO］ まずやる

①人間から動物という立場にポジションチェンジ、はじめに動物に関心をもつアイスブレイク

②動物が生きる「環世界」を知ったり、環境の変化にともなう生きづらさ、人間の脅威を想像する体感型ワーク（動物会議）

［承：CREATIVE］ 役を演じつつ発想する

③動物キャラクターになりきって対話する（人間の立場では気づかないことに気づいていくワーク）

④動物から人間へとポジションを戻し、動物たちに共感した人間（＝動物）として、人間だからこそ「できること」、そして私が「したいこと」「すべきこと」などをまず一人で考える

［転：SHARE］ 自分の考えをもちより共有する

⑤お互いのアイディアをアップデートしていくワーク（人間会議）

⑥対話した動物たちへ提案する

［続：REPEAT］ ここからがはじまり。会議は続く

⑦参加者は会議での気づきを持ち帰り、各自で調査研究する

⑧「動物新聞」などにまとめて次の会議に備える（一歩前へ）

こうしたワークが、動物たちの身体能力への驚きや共感、人間によって動物たちが悲惨な状況になっていることに対する怒りなど、自分自身の感情が揺さぶられることをとおして「閃き」を促していく。また、事前に情報を与えられず、意外な場面に遭遇した時に、自分自身は何を感じ、どう行動するか（行動できないか）など自分自身を観察する。参加者自身が初見での「閃きの瞬発力」を認知するのである。即ち、動物かんきょう会議メソッドで「閃き」を得る方法は、「起：DO（まずやる）」→「承：CREATIVE（創造する）」→「転：SHARE（共有する）」→「続：REPEAT（繰り返す）」、そしてまた「起：DO（まずやる）」へと続く過程として整理できる。

2.2.3 閃きを引き出す「対話の場づくり」

会議シーンではトレーニングされたインストラクターが、「対話の場づくり」「日本型ファシリテーション」の考え方に基づいて進行する。この考え方の提唱者である清水義晴[2)]によると、「対話の場づくり」のベースは信頼関係であるという。そこが「対話」と「コミュニケーション」の違いでもあるという。対話とは意見のキャッチボールができる関係性であり、一方通行の情報伝達とは違うということなのだ。したがって、場づくりにおいては、不特定多数や匿名での参加ではなく、一人ひとりが実名で紹介しあえること、例えば、特定の閉ざされたコミュニティ、または面識がある信頼ある人からの紹介で参加するなど、不特定多数の逆「特定少数」で参加メンバーを構成する。

「対話の場づくり」では、①対話の前提は信頼関係、②信頼ある対話からは場が生まれる、③信頼ある場からは価値が生まれる、という点が重要とされる。

動物かんきょう会議の対話の場の目的は、新たな価値創造につながる閃きを引き出すことである。一般的な会議にあるような、情報を参加者同士が時間内で共有したり、具体的に意見をまとめることが目的ではない。また、ディベートのように相手の意見を論破する、勝つか負けるかを競うものでもない。むしろ、相手の「案」に対して、さらに「いい案」で投げかえすことを心がけて対話をしつづけることが重要とされている。

2.2.4　自己肯定感を高める「日本型ファシリテーション」

次に、「日本型ファシリテーション」である。清水によって提唱されているコミュニケーションの極意である。「教えない・仕切らない・まとめない」を対話の本質ととらえ、場に即興劇をつくりだすことがファシリテーターの役割であるという。

日本型ファシリテーションで重要とされるのは、①教えない、②仕切らない、③まとめない、ことである。

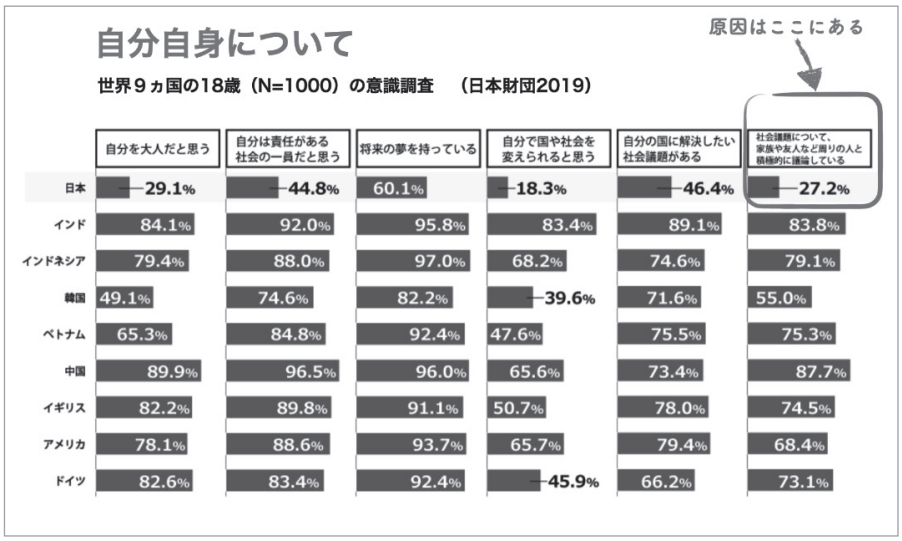
教育現場での先生（Teacher）の役割は「正確に教えること（Teaching）」であるから、ファシリテーター（Facilitator）の役割「引き出すこと（Facilitation）」は真逆の役割である。さらに、清水の説明によると「日本型と欧米型との違い」であるが、欧米型ファシリテーションはあらかじめ想定されているゴールにむけて、時間通りに参加者を上手にナビゲートしていく手腕が欧米型ファシリテーターには要求される。着地点がすでに予定されているのでは、想定外の奇想天外なプランなどが生まれるはずはないだろう。

一方、日本型ファシリテーションは、参加者を信頼し、場を委ねる。そして正しいとか、まちがっているかなどは気にせず、楽しくも真剣で本気の発言を促すことが日本型ファシリテーターには要求される。つまり、参加者全員に当事者としての自覚を芽生えさせることを狙いとしている。さらにいつもは控えめな人が思いがけない発言（アイディア）をしたりすることで、参加者同士が参加メンバーの個性、多様性に気づいていく創発のプロセスを大切にしている。ゴールイメージを最初から限定しないからこそ引き出される価値があるとする考え方なのだ。

日本型ファシリテーターは、でしゃばらず、場における縁の下の力持ちである。時間管理、結果重視、効率優先の現代社会においては、とても非効率、無駄も多いコミュニケーション手法と感じるかもしれない。しかし、参加者全員に自ら考えることを促し「当事者」にしていくことで、責任と自覚を促していく。単なる批評家や傍観者にはなれないのだ。前向きなアイディアを出せる人が場からはリスペクトされていくため「自己肯定感を向上させる」手法であると考える。

ここで、日本の若者たちの現状についてデータにもとづいて論じてみたい。世界の 18 歳を対象とした日本財団の調査「自身について」（表 1）によると、日本の若者たちは、「自分は大人だと思う」「自分で国や社会を変えられると思う」などいずれの項目においても、他国に比べて特徴的に割合が低いという結果である。

表 1　世界の 18 歳の意識調査「自分自身について」



出典：日本財団　世界 9 ヵ国の 18 歳（N=1000）の意識調査　2019

Q1：自分は大人だと思う
日本：29％ インド：84％ インドネシア：80％ 韓国：49％ ベトナム：65％中国：90％ イギリス：82％アメリカ：78％ ドイツ：82％

Q4：自分で国や社会を変えられると思う
日本：18％ インド：83％ インドネシア：68％ 韓国：39％ ベトナム：48％中国：66％ イギリス：51％ アメリカ：66％ ドイツ：46％

Q6：社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論している
日本：27％ インド：84％ インドネシア：79％ 韓国：55％ ベトナム：75％中国：88％ イギリス：75％ アメリカ：68％ ドイツ：73％

この中で、私が注目したのはQ6で、日本は他国に比べて「社会課題について、家族や友人など周りの人と積極的に議論」する機会が圧倒的に少ないという調査結果である。

議論のベースは「自分軸」と言われている。自分軸があることで、相手の意見に対して自分の意見を交換できるのだ。逆に自分軸がないと、相手の意見に対して反応できず、受け身となり、議論に参加しづらくなる。「自分軸」を持っている人は自己肯定感が高いと言われている。また「自己肯定感の年齢別推移」青少年の体験活動に関する意識調査(平成28年度調査　独立行政法人国立青少年教育進行機構）（荒川 2019）によると、10歳～12歳の子どもから若者となる成長期間が「自己肯定感は低くなり依存体質となる」ターニングポイントだと指摘されている。

日本型ファシリテーションは、対話の中で当事者として考え本気で発言を促すことによって自分軸を引き出してくれる手法と言えるだろう。

2.3　Animal SDGs の視点でクリエイティブを再定義する

ここまで「クリエイティブ」が大切であると論じてきたが、そもそも「クリエイティブ」とは何であろうか？

「CREATIVE」には、創造的な、独創的な、創造力のある、工夫してつくるなどの意味をもつ言葉であるが、語源はラテン語の CREARE で、産み出すこと、育てることである。また「創造する」という意味合いには、神が世界を創造したというニュアンスも含まれる。つまり、人間には神に近い能力が与えられているのである。その能力を何に使うべきかという視点から、「クリエイティブ」を再定義してみたい。

図 3 に示すように、今の自分のステージを「i（スモールアイ）」としたときの、あるべき姿を「I（ビッグアイ）」とする。当然、そこには現実

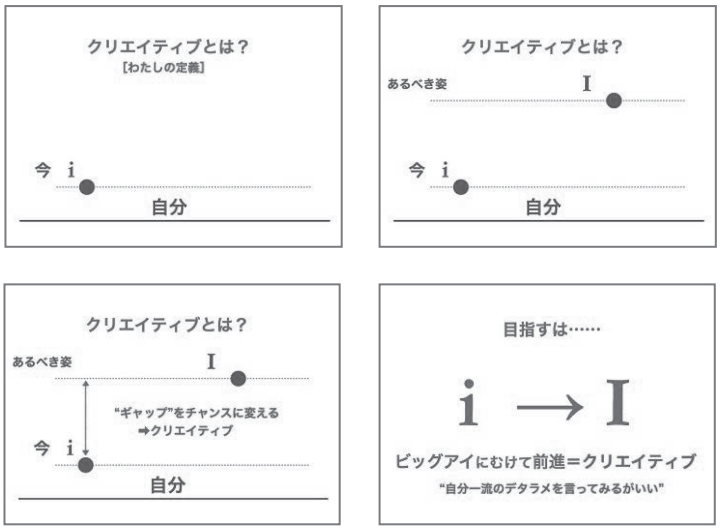


図 3 クリエイティブとは？

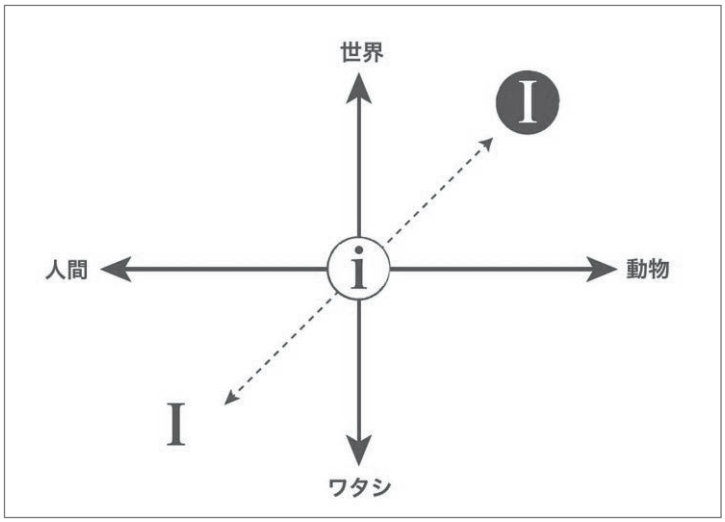


図４　Animal SDGs の視点でのクリエイティブ

と理想とのギャップがある。そのギャップを感じた時、そこから逃げるか、それともギャップを解消するためにチャレンジするか。この「ギャップをチャンスに変える閃き」こそがクリエイティブだと定義したい。つまり、自分自身をポジティブに「一歩前へ」と前進させることである。

重要となってくるのは、あるべき姿「I（ビッグアイ）」をどの位置にプロットするか（できるか）である。図４を参照いただきたい。例えば、左下の「I（ビッグアイ）」は「エゴ（EGO）な I（ビッグアイ）」である。「自分さえ良ければいい」「自分の家族さえよければいい」「自分の地域（会社）さえよければいい」または「自分の国（民族）さえよければいい」「人間（ホモサピエンス）さえよければいい」等々いずれも自分・人間中心でしか世界を見ない態度である。

対して、「Animal SDGs」の視点は、「I（ビッグアイ）」を右上「エコ（ECO）な I（白抜きビッグアイ）」に置き、未来ビジョンを描いていこうという発想である。そこからは、「地球は人間だけのものではない」「人間も動物である」「動物たちと相談しよう」「動物の能力を味方にしてクリエイティブしよう」「動物や自然と共生させてもらえる人間の役割とは？」という気づきを促していくことになる。

私たちはどうしても「自分中心」に考えがちである。身の回りの状況が悪化するとなお「自己」となる。だからこそ、あえて「利他」の視点に身を置くことで、「共に生きる」本質を一人ひとりが気づいていく。このことはサスティナブルを考えていく上で重要であると考える。自分と他者との関係性。どう折り合いをつけていくか。そこにあるギャップをチャンスに変えようとするポジティブマインドの精神状態を自分自身でつくりだすことがクリエイティブなのである。

この考え方は、地域活性化、まちづくりにも応用できる。地域活性化の本質は「自分自身が活性化すれば、地域社会は活性化する」。活性化は他人から与えられるものではないという当たり前のことである。別の言い方をすると、「自分を活性化できない人に、他人を活性化できるはずがない」ということだ。自分自身で活性化するために必要な条件。それが「①クリエイティブ」「②自己肯定感」そして「③自分と他者との関係性に気づき」だと私は考えている。

Animal SDGs では、次のように活動ミッションを定義している。

「豊かな国がある。その一方で、世界のどこかの国が貧しくなる。わたしは幸せな生活を享受する。その一方で、世界のだれかが不幸な生活を耐え忍ぶ。人類は繁栄する。その一

方で、動物たちはより苦しみ、絶滅へと向かっている。」

この関係性に気づくことが、SDGs テーマを考えていく上で大切である。……今、人間だけに与えられた「地球を変える力」を発揮して、動物たちと自然界に共生させてもらえる人間となるためには、より多くの対話が必要だ。Animal SDGs は「子ども × 若者 × 誰でも」が対話を深めていくことを促すストーリーであり社会事業活動である。

「Animal SDGs」の視点でのクリエイティブは、このように、「共に生きる」未来ビジョンに向けてギャップをチャンスに変えていく閃きのことなのである。

2.4 「動物になって考えてみる」と何が見えるか

「動物かんきょう会議」メソッドでは、参加者は全員、想像力の翼を広げて「動物（キャラクター）」となり対話をする。「動物になって考えてみる」と何が見えてくるのだろうか。異文化コミュニケーションでは、双方に立ちはだかる壁は「乗り越えるもの」ではなく、「消し去るもの」という発想がある。対立ではなく、魔法のようなもので消し去るのである。「動物になって考える」ことで得られる気づきは、一種の魔法のようなものかもしれない。

宇部市が実施している「せかい！動物かんきょう会議」の動物園プログラムのひとつで「気づき」が得られるプロセスを見てみよう。

宇部市のときわ動物園は日本初の全園生息環境展示を実施している動物園である。生息環境展示とは、動物の生息地の自然環境を再現することで、動物たちの野生本来の生態を観察できる展示方法。ときわ動物園は、東南アジア、中南米アマゾン、アフリカ・マダガスカル、山口の里山の 4 つのゾーンで構成され、世界中の猿たち約 15 種の生態を観察できるユニークな場である。アジアの森林ゾーンでは、類人猿であるシロテテナガザルが枝から枝へとのびのびと移動している様子を観察できる。

このシロテテナガザルの生息地である東南アジアでは森林が伐採され、代わりに植えられているのはパーム油製造のためのヤシの木なのだ。人間たちは「木を伐採した後に植物を植えているので問題ない」と考えているかもしれないが「枝のないヤシの木」につかまることができないシロテテナガザルは移動することができず生息域が分断され、さらにヤシは食料にもならず、現在悲惨な状況に陥り絶滅の危惧にあるのだ。

この状況に驚いた子どもたちは「なぜ人間たちはそんなに油が必要なの？」と疑問を持ち、さらにヤシを原料とするパーム油がわたしたちの日常生活で使用する加工食品や洗剤、バイオ燃料などの原材料となっていることを知ったとき、自分自身がシロテテナガザルを苦しめている当事者であることに気づくのだ。

実際にシロテテナガザルを観察しながらの対話で、次のような気づきがあった（出典「Animal SDGs」コンセプトブックより）。

【気づき】

SDGs の 17 項目のどれか一つの目標だけを達成しようとすると他の目標の解決の妨げになったりする。例えば 2 番の食料を確保するために森を畑に変えれば、15 番の陸の生き物たちが行き場を失うこともある。そして、次のような「SDGs への疑問」に深まるのだ。

【SDGs への疑問】

何をするにしても、SDGs の 17 項目すべてを同時に見渡して、そのどれかを目標にするのではなく、どの目標にも反しないやり方を考えることが大切なのではないだろうか。

【SDGs への疑問】

SDGs が定義する『サステナブル』とは、今を持続可能にすることではないようだ。すでに

50年前にそれは無理だと指摘されていた。今のSDGsムーブメントには違和感を感じる。

日本やアジアには、①生物・無機物を問わず全てのものの中に霊が宿っていると考えるアミニズムや日本の八百万の神の世界観、②一切衆生。生きとし生けるものすべて、動物も植物もみんな私たち人間と同じいのちが繋がっていると考える仏教思想、③アイヌ民族による「アイヌ（人間）とカムイ（人間以外の全て）の関係性」にあるように、天から遣わされるものには全て役割があると考える世界観、④1万年もの間、争いのない世界を生きてきた縄文人が創り出した世界観、⑤さらにはスタジオジブリの宮崎駿・高畑勲監督のアニメ映画等で示される自然観、等々。これら古からの脈々と続いている世界観や宗教観、自然観に慣れ親しむ感性からは「動物は資源」という発想には違和感がある。

むしろ、「地球は人間だけのものじゃない。人間も動物も同じかけがえのない命、動物と人間との共生共存が大切」と感じる心から生まれる閃きを発展させ、社会システムやライフスタイル、ビジネスモデルを発明し、日本から世界へと波及させていくことが日本だからこそできるSDGs「環境 × 社会 × 経済」と考える。このように、「動物になって考えてみる」こと、人間以外の目線になる「Animal SDGs」を実践することで、SDGsへの疑問や問い、気づきが炙り出される可能性があるのだ。

ここまで私の問題意識と、宇部市で実施されている本メソッドを三鷹で再現する意義などを述べてきたが、次章では、宇部市モデルがどのように実施されているかを整理する。

3　山口県宇部市での取り組み［先行事例：宇部モデル］

本章では、「宇部モデル」の始まりから現在までを概観し、「動物かんきょう会議メソッド」が宇部市で定着しつつある理由を考察する。

宇部市　SDGs未来都市計画2021～2023（令和3年3月策定）
「次世代を担う「人財」の育成
1.「せかい！動物かんきょう会議」の開催による次世代を担う「人財」育成

国内で初めて全園での生息環境展示を採用した「ときわ動物園」を対象とする宇部市をフィールドに、「せかい!動物かんきょう会議プロジェクト」、キッズデザイン協議会等の協力を得て、未来を担う子どもたちが世界の様々な文化や環境などを学び、持続可能な社会について考える「せかい!動物かんきょう会議」を開催する。このことにより、SDGs 視点（世界的・第三者的視点）に立った多様な発想・行動ができる次世代「人財」を輩出する。また、インストラクターは大学生、留学生、市民から募集し、幅広い層への普及を図る。
出典：宇部市ホームページ
https://www.city.ube.yamaguchi.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/007/066/sdgs_plan_2nd_for_cms.pdf

【報道発表】令和3年度「せかい！動物かんきょう会議 in SDGs未来都市UBE」を開催します
（ウェブ番号1013196　公開日2021年7月21日）

本市では、SDGs未来都市として、人間の立場や地域の枠を超えたSDGs視点（世界的・第三者的視点）に立った多様な発想・行動ができる「人財」育成に取り組んでいます。
今年度は、学童保育クラブ（5ヶ所）及び小学校（2校予定）の児童を対象に、「せかい！動物かんきょう会議 in SDGs未来都市UBE」の教室プログラムを開催します。（中略）

「せかい！動物かんきょう会議」では、子どもたちは、まず動物の立場に立ち、人間から受けている様々な問題（脅威）を考えます。次に、人間の立場から、その問題（脅威）について、解決方法を考え、議論するという一連のプロセスを通して、他者の立場を理解し、多様性を認めていく態度、多面的に考え解決する力を身に付けていきます。

（以下省略）
https://www.city.ube.yamaguchi.jp/shisei/kouhou/kishahappyou/1008059/1012897/1013196.html

図5　宇部市の発表資料

3.1　宇部市における位置付け

「せかい！動物かんきょう会議 in SDGs 未来都市 UBE」は、山口県宇部市の宇部 SDGs 推進事業の一環として実施されている。

2018 年 6 月 15 日に、国は地方創生分野における日本の「SDGs モデル」を構築していくため、自治体による SDGs の達成に向けた優れた取り組みを提案する 29 都市を「SDGs 未来都市」として選定した。宇部市が内閣府へ提案した申請書によると、『人財は宝』をテーマに地域リソースであるときわ公園内の「ときわ動物園」をフィールドに、ジュニア世代を対象とした「せかい！動物かんきょう会議」を実施することが盛り込まれており、採択をきっかけに 2018 年～2020 年の 3 年間実施されている。その後の「宇部市 SDGs 未来都市計画（2021～2023）『人財が宝』みんなでつくる宇部 SDGs 推進事業～『共存同栄・協同一致』の更なる進化～」で事業としては継続となった。宇部市では地域を支える人の力を地域発展の財産『人財』と位置づけ、宇部 SDGs 推進の原動力をしていることがわかる（図 5 前半）。また、宇部市の報道発表では、本活動が「人間の立場や地域の枠を超えた SDGs 視点（世界的・第三者的視点）に立った多様な発想・行動ができる『人財』育成」と説明されている（図 5 後半）。

3.2　宇部モデルの全体像(2018～2022 年度)

宇部モデルは、図 6 に示すように全 3 部で構成される。第 1 部はインストラクター養成講座を開催して、本メソッドをマスターしていくインストラクターづくりである。第 2 部は子どもたちとの対話である。①学童・小学校・中学校・高校など教室での実施。②動物園の教育普及担当による実施。③世界のインストラクターによる現地子どもたちへの実施。第 3 部は、第 2 部に参加した子どもたち、若者、大人たちが集い創発し合う全体会議である。

2018 年から 2021 年にかけての参加者推移（表 2）によると、1 年目は山間部の小学校をモデル校に、小規模ながら「教室プログラム＋動物園プログラム＋全体会議」までの通しイベントを実施し主催者ならびにインストラクター、学校校長など関係者が全体の流れを体験している。2 年目になると、メインターゲットである「10～12 歳（小学

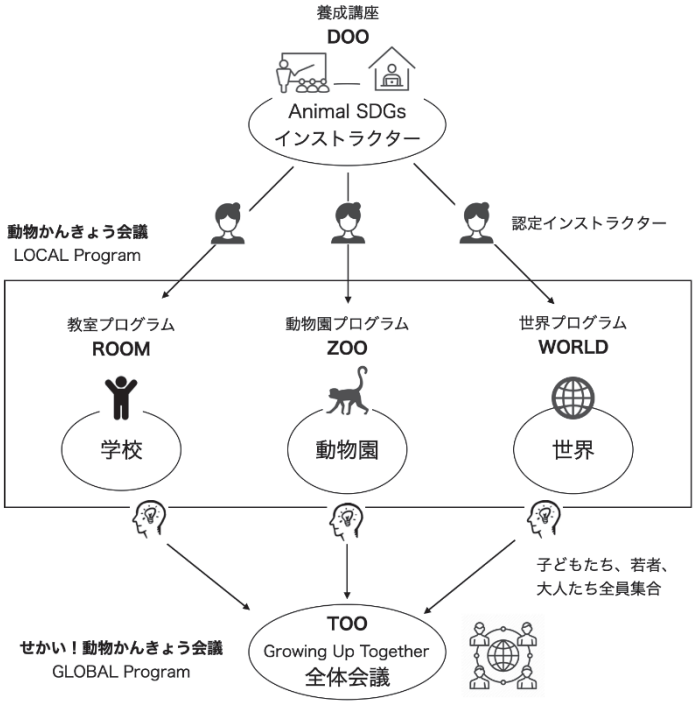


図 6　宇部モデルの構成

4～6 年生）」に加えて、「中学生」に対してプログラムを実施している。全体会議も多世代交流で実施している。3 年目はコロナパンデミックによる影響で、学校内での対面型イベントはすべて中止となり、①学童の子どもたちに対しての実施、②リモート会議システムをつかった非対面型での実施など臨機応変に工夫して実施。4 年目は教育委員会との関係、教員研修に参加した教師からのリクエストで参加校が増え、子どもたちの参加者数大きく伸びている。

年間のべ参加者は、当初の 2018 年が子ども 125 人、若者・大人が 35 人だったが、4 年目の 2021 年には子ども 1,346 人、若者・大人が 331 人となっている。

表 2　宇部モデルの参加者数推移

	2018（1 年目）	2019（2 年目）	2020（3 年目） コロナパンデミック	2021（4 年目） コロナパンデミック
DOO インストラクター養成講座	半日講座 3 回	半日講座 8 回	非対面型 1 回 （講座 3 回＋会議 2 回＋面談）	非対面型 2 回 （講座 3 回＋会議 2 回＋面談）
フォローアップ研修（受講者）				2 回
インストラクター認定（受講者）	15 名（15 名）	38 名（75 名）	23 名（50 名）	24 名（40 名）
現場責任者（インターン生）	2 名（13 名）	5 名（20 名）	3 名（10 名）	8 名（13 名）
教員研修（教育委員会）				25 名
ROOM 教室プログラム	2 校（5 回）	小学校 2（5 回） 中学校 1（2 回）	学童 2（2 回）	学童 4（4 回） 小学校 8（16 回） 高校 2（3 回）
ROOM+XR 非対面教室プログラム			小学校 1（3 回） 34 名	
子ども　のべ参加者数	85 名	165 名	45 名	1,227 名
ZOO 動物園プログラム	20 名	63 名	11 名	4 回（83 名）
ZOO＋XR 非対面動物園プロ			54 名	
子ども　のべ参加者数	20 名	63 名	65 名	83 名
WORLD 世界プログラム			ミャンマー　10 名	タイ　15 名 モンゴル　28 名
TOO 全体会議	1 泊 2 日	1 日	1 日	半日（第 1 部実施）
子ども参加者数（内大人）	26 名（6 名）	93 名（30 名）	17 名（12 名）	33 名（15 名）
のべ参加者：子ども	125 名	291 名	125 名	1,346 名
のべ参加者：若者・大人	35 名	145 名	85 名	331 名

各年度の全体会議実施の状況は次の通りである。

◆2018 年度（1 年目）の全体会議（写真①）

モデル校（中山間部複式学級）＋市内の計 20 名の子どもたちと 1 泊 2 日で開催された。

写真①

◆2019 年度（2 年目）の全体会議（写真②）

市内小・中学校の子どもたち、協賛パートナーの日本航空従業員インストラクターも加わり約 100 名がコンベンションホールに集まり全体会議を開催された。

写真②

◆2020 年度（3 年目）の全体会議（写真③）

コロナパンデミックの影響で市内の密になるイベントはすべて中止となる。非対面型イベントに組み立て直し、小規模であるがリアル会場＋リモート会場のハイブリットで開催された。

写真③

◆2021 年度（4 年目）の全体会議（写真④）

当初、コンベンションホールでの全体会議を実施する計画だったが開催 2 週間前にコロナパンデミックの影響で対面イベントは中止になる。非対面型イベントに組み立て直し、日本・タイ・モンゴルの子どもたち約 20 名が同時にリモート中継でつながるライブ対話形式「せかい！動物かんきょう会議」が開催された。

写真④

3.3　本モデルが宇部市で定着しつつある理由

宇部モデルはコロナ禍の中でも順調に拡大し定着しつつある。その理由を分析すると、主に次の 5 点の成果と考えられる。

① 自治体の特徴：「子ども × 若者 × 誰でも」への人財育成を推進している

② 市民が主体的に参画:地域人財がインストラクターとして活躍している

③ 地域リソースとの連携：観光資源である「ときわ動物園」の特徴を活かしている

④ グローバルな連携:世界の子どもたちとの国際交流が盛り込まれている

⑤ 国や他地域への波及：自治体 SDGs のユニークな事例は他地域に波及している

各項目について詳細を見ていく。

① 自治体の特徴

宇部市は、子どもたちや若者と地域の大人たちの交流による人材育成を推進しようとしている。2018 年、久保田后子宇部市長との初対面の際「未

就学児の子どもたちへは、待機児童問題・子育て支援等、自治体は比較的手厚くサポートしているが、ジュニア世代（小・中学生）向けの施策は少なく、どちらかというとほったらかしにしてきた感がある。感受性豊かな子どもたちに地域の大人たちが関わることは、地域課題の理解を促し、地域への愛着も育まれ、地元に残り、地域課題を解決する担い手になってもらえるのではないかと考えている」と語っている。「動物かんきょう会議メソッド」の開発元であるヌールエデザイン総合研究所代表・筒井は、その久保田市長からの「宇部には『ときわ動物園』という全国初の全園生息環境展示で、野生の中にいるように感じられる動物園がある。リニューアルしたばかりだ」との発言をうけて、「動物かんきょう会議プロジェクトは『動物になって考えよう』と活動してきたが、本物の動物といっしょに会議をしてきたことはない」と応じ、生息環境展示のときわ動物園を翌週視察し、宇部市ときわ動物園を活用する人財育成プログラム「せかい！動物かんきょう会議」の実施にむけて協議していくことになった。SDGs 未来都市に採択後、宇部市総合戦略局が本事業を担当することとなり、主催：宇部市、業務委託：ヌールエデザイン総合研究所という体制でスタートする。

② 市民の主体的な参加

本メソッドを実施するうえで最も重要なのが「子どもたちと対話するインストラクター」である。2018 年秋に実施された最初のインストラクター養成講座では宇部市からの推薦で市民・大学生・留学生など 15 名程度が集まった。最初は東京から派遣されるインストラクター数名が学校現場でメインファシリテーションを行い、養成講座受講生（0 期生）はインターンとして現場でサブの役割で参加し、徐々に責任あるポジションの担い手になっていく。現在、宇部市での本活動を主体的に推進している人財は宇部市民 0 期生メンバーであり、東京からの人材派遣ではない。注目すべきは、インストラクター候補を宇部市の担当者が自ら有望市民にお声がけして、一本釣りの形で集めたことである。地域で活性化している人財は、その仲間たちへの波及効果も大きく、口コミで広がり、自発性のある優秀なインストラクター人材が育っている。

③ 地域リソースとの連携

ときわ動物園（園長：多々良成紀、名誉園長：宮下実）の特徴は、15 種もの世界の猿族（類人猿・真猿・原猿）が飼育されている点である。その特徴を活かし、アジアの森林ゾーンから「シロテテナガザルと対話」、アフリカの丘陵マダガスカルゾーン「ワオキツネザルと対話」、山口宇部の自然ゾーン「ニホンザルと対話」の 3 つの対話型プログラムが完成している（図 7）。

図 7　3 つのときわ動物園の対話型プログラム

④ グローバルな連携

宇部市には山口大学、宇部高専、日本の大手総合化学メーカーの宇部興産があり、インドネシア、ベトナムなど東南アジアからの留学生も多い。また、姉妹都市として、オーストラリアのニューカッスル市、スペインのカステジョ・デ・ラ・プラーナ市、友好都市として中国の威海市がある。宇部市主催の「せかい！動物かんきょう会議 in SDGs 未来都市」事業には、協業連携パートナーとして日本航空 JAL、公益財団法人オイスカ、キッズデザイン協議会、後援として JICA、環境省中国四国環境事務所が名を連ねている。メディアとしては、新聞の「宇部日報」「山口新聞」「毎日新聞」「読売新聞」、地方 TV 局の山口放送が広報サポートしている。

日本航空 JAL は、社員（CA、空港勤務、整備等）30 名以上がインストラクター養成講座を受講し、

宇部市でのプログラム実施の担い手や、美祢市(観光協会)、北海道釧路市でのプロジェクト展開の担い手になっている。またジャルパックがSDGs未来都市UBEツアー「JALダイナミックパッケージでいく小学生中〜高学年向け　かんきょうをみんなで考える学習ツアー」を実施した。民間企業との連携は、日本航空から宇部市戦略局へ出向し、宇部 SDGs の推進担当となった日本航空社員による尽力が大きい(https://www.jal.co.jp/domtour/jaldp/animal_conference/)。

公益財団法人オイスカは、国際的な農業開発協力、環境保全、人材育成などの活動を行い、国際支援活動を目的としたNGOとしては長い歴史がある。世界各地で子どもたちが展開する植林活動「子供の森」計画には、現在36の国と地域で5,000校以上の学校が参加している。「せかい！動物かんきょう会議」では、現地コーディネータースタッフがインストラクター役となり、現地校でのプログラム実施の担い手になっている。2020 年度はミャンマーの子どもたちを撮影した動画を使用したリモートによる会議、2021年度は日本・タイ・モンゴルの3カ国の子どもたちがリモート中継でのライブ会議を成功させている。

キッズデザイン協議会からは「キッズデザイン賞」審査委員長の益田文和氏が本プロジェクトのアドバイザーに就任。また理事のひとりが宇部でのプログラム実施に伴走支援した。

JICA(国際協力機構)の本プロジェクトへの関わりは、現場取材、JICA広報誌での活動紹介などがあるが、いずれ、世界の実情を知る、青年海外協力隊のOB、OGをインストラクターにしていくことを構想している。

⑤ 国・他地域への波及

内閣府地方創生 SDGs 官民連携プラットフォームにおいて幹事会より「世界的にも自己肯定感の低い子供たちが多いのは日本の大きな問題だと思います。また、動物園などが活用できるスキームが構築できれば、動物園の経営にもプラスになると思います。個人的にも動物との対話や魚や植物との対話は、命のつながりや生態系理解においても非常に重要だと感じています」と評価された(https://future-city.go.jp/platform/session/detail_n009.html)。

宇部市モデルは自治体 SDGs のユニークな事例として、宇部市外に取り組みと関係人口が広がっている。2020年のコロナパンデミックにより、リモートでのインストラクター養成講座の開催、研究分科会の実施にともない宇部市外の関係者が増えた。山口県では山口市、美祢市、下関市、萩市、山陽小野田市。県外では東京都(三鷹市、豊島区、

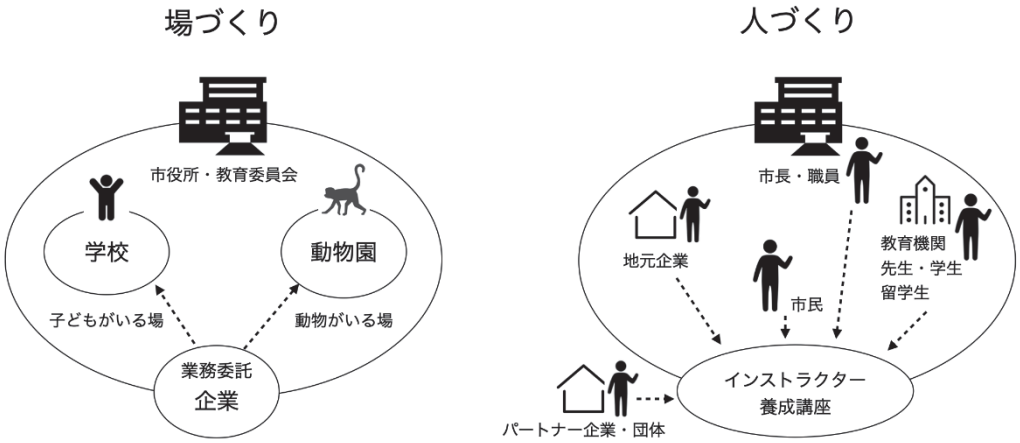


図8　民学産官連携の「場づくり」と「人づくり」

新宿区他）、新潟市、静岡市、富士市、横浜市、釧路市、札幌市。海外ではカナダ（モントリオール市）などがある。こうした広がりを得ていることも宇部市での定着に役立っている。

3.4　民学産官連携体制で推進するメリット

本事業の主催は自治体であり、著作版権元への業務委託で推進している。図８に、本事業の民学産官連携の「場づくり」「人づくり」の体制を示した。

自治体主導で「場づくり」「人づくり」を推進することの優位性を列挙する。新しいことに対して、一般に他人は警戒するものである。ところが、

① 市の事業であるから、学校現場・動物園の協力を得て、モデル事業がつくれた。
② 市の事業であるから、市民は安心してインストラクター養成講座に参加できた。
③ 市の事業であるから、企業の協力が得られやすく、連携パートナー関係がつくれた。
④ 市の事業であるから、新聞・テレビ等のメディアで取材され、活動がブランディングされた。
⑤ 市の事業であるから、業務委託先の実績も評価され、新たな資金調達が可能となった。

つまり、自治体連携の取り組みは安全・安心、信頼関係を担保しているため、よそ者である業務委託先企業のプロジェクトが必要とする「場づくり」や「人づくり」を短期間で実現できたのである。

表３と表４はそれぞれ、本事業の１年目と４年目の主な関係者を掲げたものである。この間に、「場づくり」の学校、動物園での取り組みは大きく広がり、「人づくり」のインストラクター養成講座に多数の企業、団体、教育機関等が連携・協力するようになっている。

表３　2018 年度（1 年目）の主な関係者一覧

		組織の名称	主な役割	内　　容
1	自治体	宇部市	主催者	①実施予算　②プロジェクト担当者２名（総合戦略局）　③関係者調整　④広報活動
2	市民	宇部市民 山口大学学生 留学生	インストラクター見習い	①インストラクター養成講座を受講　②モデル校でファシリテーション（サブ）※1日・半日役割に応じて謝金
3	学校	吉部小学校（モデル校20名）1校	教育現場、対話の現場の提供	①対象は小学５・６年生　②45 分 x ６時限 ③山間部の小学校（複式学級）がモデル校
4	動物園	ときわ動物園	動物園プログラムづくりと実施	①アジアの森と「シロテテナガザル」 ②南米アマゾンの森と「オマキザル」 ③アフリカ丘陵マダガスカルの「キツネザル」 ④山口宇部の里山「ニホンザル」
5	企業	日本航空	協賛パートナー プロジェクトへの参加	①社員がインストラクター　②東京羽田⇄山口宇部　チケット
6	団体	キッズデザイン協議会	協賛パートナー 伴走サポート	①審査委員長の参加とアドバイス　②モデル校でファシリテーション
7	著作版権元	ヌールエデザイン総合研究所	宇部市からの業務委託者 総合プロデュース	①企画～実施計画　②インストラクター養成講座　③プログラムの実施　④プロモーション

表 4　2021 年度（4 年目）の主な関係者一覧

	主な組織	名称	主な役割	内　　容
1	自治体	宇部市	主催	①実施予算　②プロジェクト担当者 2 名（総合戦略局）　③関係者調整　④広報活動
2	市民 A	宇部市民（0 期生）	宇部コアメンバー研究員 こども SDGs 実行委員会	①学校現場ファシリテーション、現場責任者 ②インストラクター養成講座づくり、指導担当 ③海外交流予算分を川村財団から資金調達
	市民 B	宇部市民・協賛企業従業員・大学生 ＋ 他地域市民	インストラクター見習い（TUGUMI 資格認定　1～3 期生　60 名）	①インストラクター養成講座を受講　②実施校ファシリテーション（サブ）※1 日・半日役割に応じて謝金　③山口県・静岡県・東京都・埼玉県・新潟県・北海道・カナダ等の地域から養成講座参加
3	教育委員会	宇部市教育委員会	教育現場への理解促進	①校長会・教頭会　②教員向け 1 日研修
	学校 A	小学校・学童で実施（1,000 名程度）	教育現場、対話の現場の提供	①対象は小学 3 年～5 年生　②2 日モデル（前半：45 分 x 2 時限　後半：45 分 x 2 時限）　③1 日モデル　3 時間
	学校 B	宇部高専（モデル校）1 校	教育現場、対話の現場の提供	①対象は高校生以上　②2 日モデル　90 分 x 2 日　③高校生向けプログラム開発と実証実験
4	動物園 A	ときわ動物園（宇部市）	動物園プログラムづくりと実施	①アジアの森と「シロテテナガザル」 ②アフリカ丘陵マダガスカルの「キツネザル」 ③山口宇部の里山「ニホンザル」
	動物園 B	秋吉台サファリランド（美祢市）	体験の場の提供	①ゾウ　②カンガルー　③キリン
5	企業	日本航空	協賛パートナー 他地域へのプロジェクト展開	①美祢市　秋吉台サファリランド企画・実施 ②ひがし北海道　鶴居村・釧路市での企画
	企業	オープンハウス	事業パートナー 専門家　共同開発	①インストラクター養成講座づくり　②サスティナブルデザイン　③コンセプトブックづくり
6	団体	公益財団法人 OISCA	世界の子どもたちとの交流事業づくり	①現地インストラクターの養成 ②ミャンマー、タイ、モンゴルで実施
	団体	美祢市観光協会	動物園プログラムづくりと実施	学校・動物園での実施には、宇部コアメンバーが協力
7	大学	三鷹ネットワーク大学推進機構	まちづくり研究員サポート	①三鷹市での再現実証研究支援 ②「民学参公」協働研究事業
	大学	東京農工大学	環境教育学	南米アマゾンの森と家畜　コンテンツ協働開発

8	著作版権元	ヌールエデザイン総合研究所	宇部市から業務委託 総合プロデュース	①企画～実施計画　②インストラクター養成講座　③プログラムの実施　④プロモーション
	開発元	ヌールエデザイン総合研究所	独自に研究開発（資金調達）	①非対面型サービス開発　②Animal SDGs 開発　③コンセプトブックづくり　④対話の場　IT システム開発　⑤三鷹市での再現実証研究

宇部市の業務委託先となっているヌールエデザイン総合研究所は、上記①～⑤のメリットを活用し、独自に研究費を投じ 2 年先の取り組みにむけての研究開発（パートナーづくり、コンテンツづくり、サービスづくり）を進めようとしている。自治体連携で達成した「場づくり」「人づくり」の成果をより深化させるために次のことを計画し、実行している。

① 宇部市での取り組みを国内外にプロモーション（WEB ポータルサイト、SNS）
②「インストラクター養成講座」の非対面型サービスを開発（2020 年、新宿区サポート）
③ 汎用性のある事業モデルとするために、他の地域で再現（2021 年、三鷹市協働研究）
④ 再現時に共有する世界観。コンセプトブック「Animal SDGs」（2021 年完成）
⑤ 対話の場での体験をアーカイブ化するシステムづくり（2022 年完成予定）

4　三鷹市での取り組み［三鷹モデルづくり］

本章では、三鷹市での取り組みがどのように進んだかを、地域リソースとの連携、テーマの深化、実証実験的に行った講座の様子などから見ていく。

4.1　三鷹ネットワーク大学との協働

「三鷹モデル」は、三鷹ネットワーク大学の二つの事業に採択され、まちづくり研究員の研究及び「民学産公」協働研究事業として進めている。

2020 年 3 月、三鷹まちづくり総合研究所（事務局：三鷹ネットワーク大学推進機構）で「まちづくり研究員」募集がはじまった。ちょうどコロナパンデミックが中国から世界へと広がりはじめ、日本でも三密回避、緊急事態宣言、ステイホームが叫ばれ始めていた。私自身、宇部市へ渡航できなくなり、イベントも年内中止が現実味を帯びはじめた。今後どのようにプロジェクトを推進していくか。「ギャップをチャンスに！」あらたなクリエイティブができる機会にしていくことを心に決めたときに募集に目がとまったのだ。

研究所の所長は河村孝三鷹市長。「地域の課題解決や価値創造に役立つ幅広い分野の知見や提案」「多彩な人材を発掘」「三鷹市のまちづくりの議論と実践をより豊かに」などの募集趣旨を読みつつ、「まちづくり」は多様な価値観、利害関係者の有無、多世代間交流など、多様なステークホルダーとの対話が必要で、最難関のテーマの一つだ。新たなチャレンジに「三鷹モデル」の実践と研究を加えることを決意し、5 月に「まちづくり研究員 1 期生」となり本研究をスタートさせたが、2020 年はコロナパンデミックにより研究活動は試行錯誤となった。三鷹ネットワーク大学は、リモート会議システム Zoom やチャットツールの Slack を活用して情報共有するなど、さまざまな工夫をしながら「まちづくりラボ」「専門家からのアドバイス」「中間発表」などの指導や対話の場づくりを企画運営し、研究員活動をサポートした。

こうした新たなツールでのコミュニケーションの体験は同時進行する「宇部モデル」でさっそく役立つことになった。ときわ動物園と協働で取り組んでいるコンテンツづくりが停滞し、宇部市内小学校の教室での対面プログラムはコロナ対策で見直しされるなど、「宇部モデル」もコロナ対応

が緊急の課題となっていたのだ。宇部市民コアメンバー主体のプロジェクト推進体制づくりを進めながら、三鷹ネットワーク大学で体験したリモートでの対話手法と動画教材による非対面型「インストラクター養成講座」により新たな人材養成を行った。

以上の状況により、「まちづくり研究員」としての研究は二年計画に変更した。さらに、まちづくり研究員2年目の2021年度は、三鷹ネットワーク大学が会員・賛助会員団体を対象に実施している「民学産公」協働研究事業に応募することにした。私はこのような機会を発見すると積極的に応募する。理由はシンプルだ。自分自身で試行錯誤しクリエイトしつづけているアイディアに対して、専門家から客観的なアドバイスや知見をいただけるからだ。つまり自分自身をクリエイティブにする「対話」ができるからだ。

コロナパンデミックは2年目に入り、動物園などの公共施設は閉園状態がつづいている。そこで再現する「三鷹モデル」づくりについて再検討した。「井の頭動物園」での実施は協働研究事業の2年目(2022年度）以降とし、1年目（2021年度）に「公開講座」として「せかい！動物かんきょう会議」を実施することを計画に盛り込み申請し、2021年5月に採択され研究予算をいただくことになった。

4.2　三鷹モデルのテーマは「気候変動と家畜」

4.2.1　スタート時点でのイメージ

「宇部モデル」のどの部分を「三鷹モデル」としてローカライズするかの検討は、すでにイメージがあった（図9）。宇部市の「ときわ動物園」、対して三鷹市には「井の頭自然文化園」がある。

「三鷹モデル」のテーマとして当初考えていたのは、動物園とその周辺にいる動物をテーマにしたローカルコンテンツづくりである。「三鷹」の地名は鳥類上位の猛禽類と由来がある。井の頭恩賜公園には野鳥が多く飛来し、ヒヨドリ、メジロ、カイツブリ、カルガモ、カワウさらにはコゲラ（日本でもっとも小さいキツツキの仲間）やカワセミを間近に観察できる。また、夜中は、玉川上水付近を

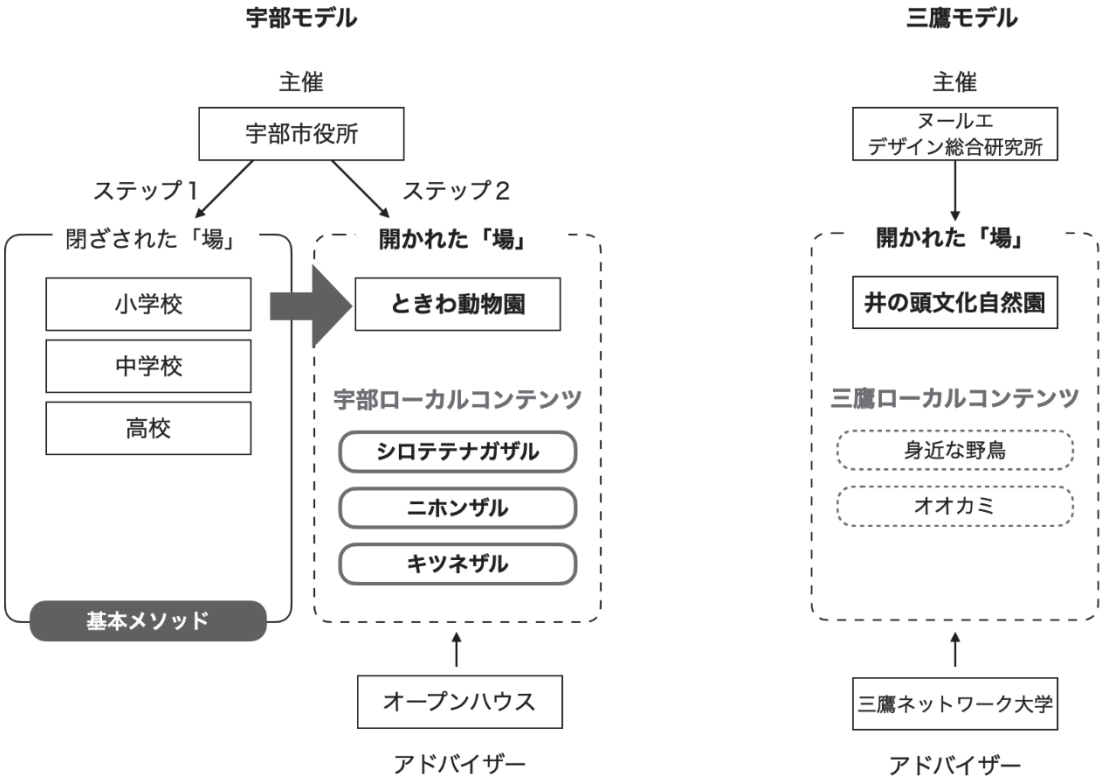


図9　スタート時点での三鷹モデルイメージ

タヌキ、ハクビシンを観察できるなど豊かな自然環境がある。身近な野生動物との共生をテーマに「都市に生息する野鳥とタヌキ」を候補とした。

もう一つは、中央線三鷹駅が東京多摩地区入口となっている立地に気づき、中央線青梅、奥多摩の御岳山頂の御嶽神社に祀られているオオカミを考えた。オオカミは明治時代、家畜に害をなすとして人間から徹底的に駆除されたこと。さらには西洋犬が持ち込んだジステンパーという伝染病により絶滅したと言われている。日本の自然環境で肉食の頂点動物が絶滅したことで生態系は大きく損なわれ、猪・鹿・猿などによる農業被害は増加し、害獣駆除が社会問題となっている。わが国の先人はオオカミに「ケモノへんに良い」と書いて「狼」となし、また「大口真神（おおぐちまがみ）」として敬い共存してきた関係性が、明治になぜ壊されたのか。今、害獣とされる野生動物との共生をテーマに「日本から駆除されたニホンオオカミ」から学ぶことを候補とした。

この２つのコンテンツづくりと「三鷹！動物かんきょう会議」イベントの再現実施をテーマに「まちづくり研究員」にエントリーした。

しかし、研究を進め、「地球は人間だけのものじゃない」という視点で持続可能な開発目標（SDGs）に対し問いかける「Animal SDGs」のコンセプトを考えるうちに、2 つの案とは別に、都会に暮らす子どもたち人間たちにとっても接点のある「家畜」という動物の存在が気になってきた。

4.2.2　東京農工大学・朝岡幸彦教授のアドバイスと協働研究

三鷹ネットワーク大学のサポートで、東京農工大学の朝岡幸彦教授の研究室にうかがい、本事業内容について相談し、以下のアドバイスをいただく。（2021.8.31／東京農工大学　朝岡研究室）

【朝岡教授からのアドバイス】

① 先生の役割は、正しい情報をデータにもとづき教えること。しかし、動物かんきょう会議のインストラクターは先生役ではなく気づきを与えるのが役割で、気づかされた側に「知った者の責任」が発生する。そういう意味でもユニークな取り組みである。

② 環境問題は、人間視点で生徒には教えることが普通で、動物視点になって人間活動を俯瞰してみるという発想はおもしろい。この「おもしろい」という要素は、子どもたちに学びを促していくうえでとても重要な要素である。

③ 家畜をテーマにすることは、さまざまな利害が複雑に絡み合い難しいテーマだが、研究には協力できる。「こども環境学」（新星出版社）という学習書をいっしょにつくった助手の河村幸子氏が関心のあるテーマである。

①の「知った者の責任」という言葉に本プロジェクトの使命を感じた。家畜のことを何も知らなかった。そして知ろうともしなかった。地球上の哺乳類の 35％が人間、人間に食べられる家畜が60％、実に 95％は人間のため。家畜が食べる穀物量は人類の飢餓を救える量（30 億人分）以上あるという。

②の「おもしろい」という要素は、絵本で伝える、アニメで伝える、生きた動物との対話で伝える、などこれまでも工夫をしてきた。コンセプトブック（原作）を脚本化して、あやつり人形をつかった芝居にし、興味関心を広げていくことを新たに構想した。

③は「本質的な問い」である。欧米ではアニマルウェルフェア（動物福祉）の考えが進んでいるが、日本の畜産動物福祉の評価は最低ランクにある。例えば、鶏の飼育面積が EU では 33kg/㎡、ブラジルでは更に低く、平均 29kg/㎡。日本の飼育密度は平均 47kg/㎡。多いところで 60kg/㎡、羽数換算で約 20 羽である。牛のゲップ対策として「ゲップやメタンを出さない飼料」の研究もある。動物側の立場に立つと人間の身勝手さに呆れてし

まうことだろう。

私はこのような対処療法的な課題解決手法には問題があるとつねづね感じている。つまり、こういうことだ。課題にぶつかる → その解決策を実施する → こんどは別の違うところで課題がでる → そしてその課題の解決策を考えて実施する → すると……云々。当人に悪気はなく、一生懸命に課題解決と向き合っているのであるが、知らず知らずのうちにとんでもない過ちを犯してしまっていることがあるのだ（図 10a）。それが今、さまざまな分野で顕在化している。家畜と気候変動、気候変動と森林火災、野生動物の絶滅、然りである。SDGs や Animal SDGs は「デザイン思考」で課題を解決していこうというアプローチである（図 10b）。三鷹モデルは「家畜」をテーマとすることに変更した。

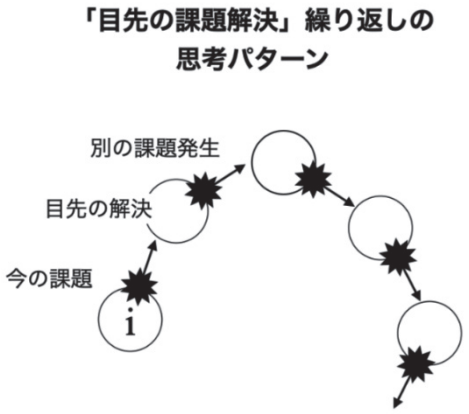


図 10a　対処療法的な思考パターン

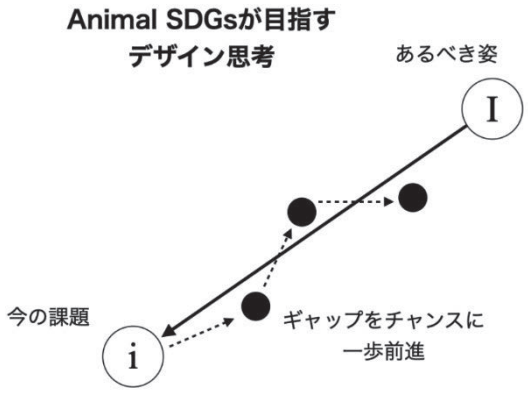


図 10b　Animal SDGs の目指すデザイン思考

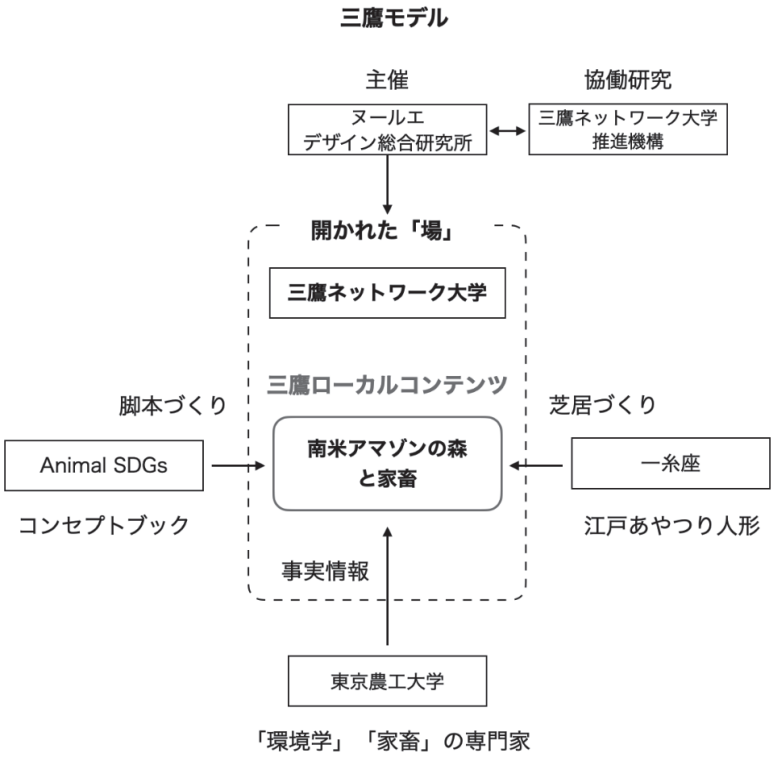


図 11　地域リソースとの連携による「三鷹モデル」イメージ

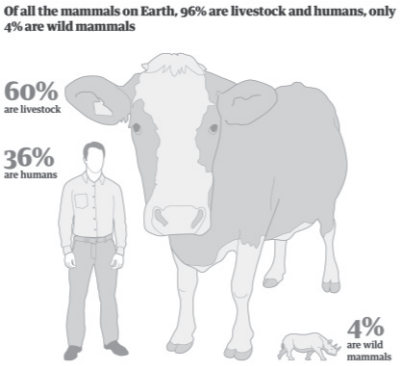
4.2.3　テーマは「気候変動と家畜」に

アドバイスを受けて家畜について調べるうち、地球上の家畜と野生動物の総数比較に愕然とした。図 12 に掲げたのは、イスラエルのワイツマン科学研究所のロン・ミロ教授が中心となりカリフォルニア工科大学の研究者とともに地球の総生物量を試算した研究結果として米国科学アカデミー紀要に掲載され、多数のメディアに取り上げられた記事の抜粋である。「地球上の鳥類の 70%が養殖で、野生の鳥類は 30%に過ぎない」「地球上の哺乳類のうち 96%は家畜と人間で、野生の哺乳類はわずか 4%」という数字は衝撃的だ。

人類は全生命の 0.01%に過ぎないが、野生の哺乳類の 83%を破壊した
［出典：The Guardian （2018）］
https://www.theguardian.com/environment/2018/may/21/human-race-just-001-of-all-life-but-has-destroyed-over-80-of-wild-mammals-study

この調査によると、世界の 76 億人の人口は、全生物の 0.01%に過ぎない。しかし、文明が始まって以来、人類は野生の哺乳類の 83%、植物の半分を失い、人間に飼われている家畜があふれています。
今回の研究は、あらゆる種類の生物の重量を包括的に推定した初めてのものであり、長年にわたって信じられてきたいくつかの仮定を覆すものである。バクテリアは全生物種の 13%を占める主要な生物であるが、植物は全生物種の 82%を占め、すべての生物種を圧倒している。昆虫から菌類、魚類、動物に至るまで、その他の生物は世界のバイオマスのわずか 5%を占めるに過ぎないのである。

地球上の哺乳類のうち、96%は家畜と人間で、野生の哺乳類はわずか 4%である
……人間活動による地球の変容は、科学者たちに新しい地質学的時代「人新世」の到来を宣言する瀬戸際まで来ている。この変化の指標となるのが、今や世界中に生息する家禽の骨である。このたびの研究で、地球上の鳥類の 70%が養殖で、野生の鳥類は 30%に過ぎないことが明らかになった。哺乳類についてはさらに深刻で、地球上の全哺乳類の 60%が家畜（主に牛と豚）、36%が人間で、野生動物はわずか 4%であることが判明した。
……人類が農耕民族となり産業革命が始まる前の推定値を比較すると、その大きな減少の全容が明らかになった。ネズミからゾウまで、野生の哺乳類はわずか 6 分の 1 しか残っておらず、科学者たちを驚かせている。海洋では、3 世紀にわたる捕鯨の結果、海洋哺乳類はわずか 5 分の 1 しか残っていない。



地球の生物量の 0.01%にすぎない人間がもたらす甚大なインパクト
［出典：World Economic Forum（2018）］
https://jp.weforum.org/agenda/2018/08/0-01/
……地球史に人類が登場した時点から今日まで、地球の総生物量は半減しています。これは、農地や放牧地を作るために人間が森林破壊を行ってきたことに大きく起因しています。
……こうした数字は、これまでに人類がどれほど多くの生物体を絶滅に追いやったかという事実のみならず、近年、生き残っている生物を我々がいかに変化させてきたのかを新たに気付かせるものでした。過去数世紀にわたり、野生哺乳類の総数は何倍にも減少。今日の家畜哺乳類の総数は野生哺乳類の 20 倍です。
……南極を除く全大陸において、家畜哺乳類の生物量は野生哺乳類を大きく上回っており、50 万頭のゾウが生息するアフリカも例外ではありません。
鳥類の生物量も大きく変化しており、ニワトリが大部分を占める家禽類の現在の総数は全野鳥の 2 倍に上ります。

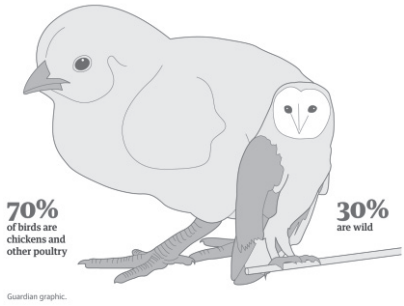


図 12　地球の総生物量の試算に関する記事

この研究レポートを目にし、「三鷹！動物かんきょう会議」のテーマとして「家畜」を取り上げる必然性を感じた。

理由①　わたしたち都市生活者として大量の家畜類を消費している。

理由② 家畜の定義は、どのような環境で飼われ、生産され、屠殺されているかについて、考える機会はほとんどない。

理由③ 家畜のゲップ（CO2 やメタン）が気候変動に大きく影響を与えているというようなコンテンツはこれまでの「動物かんきょう会議」にはなかった。

そこで、今回の三鷹ローカルコンテンツでは、Animal SDGs13 の「気候変動対策」を取り上げ、予定していた「都市に生息する野鳥」「日本から駆除されたニホンオオカミ」から「家畜」に変更することにした。家畜のゲップ（CO2 やメタン）が地球環境に大きな影響を与えていることがテーマである。

「宇部モデル」で用いた Animal SDGs15「陸の生きもの」のシロテテナガサルの語りは、ときわ動物園での「シロテテナガサルとの対話」コンテンツの内容である。動物かんきょう会議のアドバイザーでサステナブルデザインの専門家、益田文和氏 [3] とコンテンツを制作した。今回も同様に共同で、地球の肺ともいわれる南米アマゾンのジャングルが伐採され、牧場になっていることをコンテンツの骨子とする「南米アマゾンの森と家畜」の制作が始まった。

図 13　Animal SDGs13「気候変動対策」

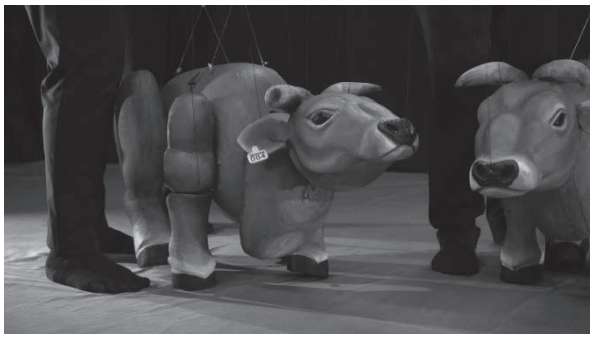
4.3　三鷹オリジナルコンテンツによる再現実証

オリジナル教材「南米アマゾンの森と家畜たち」が完成した。Animal SDGs13「気候変動対策」（図 13）をテーマにしたコンテンツである。動物かんきょう会議のキャラクターたちによる問題提起からはじまり、アマゾンの牧場のウシたちによる会話で家畜の境遇を表現した。

①脚本＆動画教材：動物によるデモ
「熱帯雨林を守れ！　無駄に肉を食うな！」
『せかい！動物かんきょう会議』キャラクターで子どもたちへの案内役として活躍するのら猫クロッチ、故郷を大規模森林伐採で失ったアマゾン出身のワニで頭に血がのぼるとおさえきれないワニールが登場して問題提起する（写真⑤）。

写真⑤

②脚本と動画教材：Animal SDGs 13
「牧場の牛」
コンセプトブック Animal SDGs の 13「気候変動対策」に登場する南米アマゾンの牧場の雄牛が 2 頭による会話で家畜の境遇を表現した（写真⑥）。



写真⑥

これらを用いた「Animal SDGs 第１回 三鷹！動物かんきょう会議（ワークショップ）～南米アマゾンの森と家畜たち～」は、三鷹ネットワーク大学を会場に協働研究関連講座として 2021 年 12 月 19 日(日)に開催した。位置付けとしては次年度以降の動物園などと連携した本格実施に向けた実証実験で、リアル会場とリモート参加のハイブリッドでのワークショップである。構成は表５のタイムスケジュールの通り。

表 5　三鷹！動物かんきょう会議タイムスケジュール

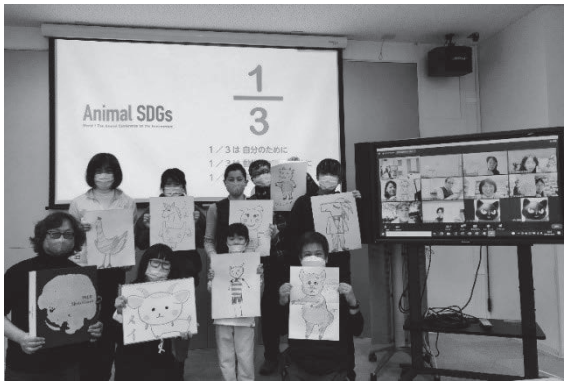
第１部	13:00～14:00	人間から動物へ	動物キャラクターづくり等
第２部	14:10～15:00	テーマ「家畜」	芝居視聴　～　動物会議
第３部	15:00～16:00	動物から人間へ	人間としてできることを考える
第４部	16:00～16:30	家畜についてのお話	家畜になるきっかけは？ 家畜になった動物を改造 他

司会進行：末積裕美子（前半）　荒川信浩（後半）
ゲスト講師：河村幸子
人形芝居：一糸座（結城一糸、結城民子、結城敬太、他）
ZOOM 進行会場サポート：イアン、筒井公子
技術・運営：三鷹ネットワーク大学

進行役は宇部市主催のインストラクター養成講座に三鷹市、埼玉県からリモート受講したメンバー2 名が担当。ゲスト講師として東京農工大学朝岡研究室の河村幸子氏に解説をお願いした。当日参加者はリアル会場が５名（子ども１名、学生２名、社会人２名）、リモート会場 10 名（子ども２名、社会人８名）である（写真⑦⑧⑨）。

参加者アンケートから、内容に対する満足度は高く、気づきの多い会議となった。人形芝居による問題提起には「芝居を生で見たい」「人形に触りたい」他。ゲスト講師による「家畜についてのお話」では、「私たちがいかに家畜のことを知らないか」を共有し、資料が欲しいという声も多かった。また、実際に家畜に触れる機会も大切だという声があった。

写真⑦



写真⑧

写真⑨

5　考察のまとめ

5.1　「宇部モデル」「三鷹モデル」の比較

先行事例「宇部モデル」分析では、①自治体の特徴、②市民の主体的参画、③地域リソースとの

連携、④グローバルな連携、⑤国・他地域への波及、という観点で定着の理由を探った。この観点に従って「三鷹モデル」との比較を行ってみる。図 14 は、「宇部モデル」と「三鷹モデル」の構成と関係を図示したものである。

①の自治体の特徴として、宇部市主催の「宇部モデル」に対し、「三鷹モデル」では三鷹市の特色ある機関である三鷹ネットワーク大学のまちづくり研究員事業及び「民学産公」協働研究事業として取り組んだことで三鷹ローカルコンテンツを制作し展開することができた。宇部市では、「SDGs 未来都市」の子どもたちを対象とする地域の大人たちの交流による人材育成として小中学校や学童保育所などの閉じた「場」でも積極的に進められているが、三鷹市では学校を核とした地域づくりとしてスクール・コミュニティを推進しており、今後はこれを意識した展開が重要な鍵になりそうだ。

②の市民の主体的な参画では、地域を構成する開かれた「場」（宇部：ときわ動物園／三鷹：三鷹ネットワーク大学）で実施する「動物かんきょう会議」イベントに対して、宇部サイドの人材、三鷹サイドの人材の相互交流、協力関係をつくることができたことで大きな進展があった。交流のプラットフォームになったのが宇部市主催の「インストラクター養成講座」である。コロナパンデミックの影響で 2020 年から非対面型サービスで実施したことで、これまでの宇部での閉じた場での実施から、開かれた場での実施となった。運営ノウハウについては、まちづくり研究員研修やまちづくりラボの運営を真似たリモート会議システムを活用した対話手法でつくることができた。宇部市のサービスを三鷹市でのノウハウで実現できたのだ。動画教材（講座 1「こども SDGs とは？」、講座 2「子どもの力を引き出すには」、講座 3「ときわ動物園の動物たち SDGs」）は新宿区のものづくり補助金を活用して制作した。

また、2020 年度以降、宇部市では市民インストラクター主体のプロジェクト推進体制づくりが急速に進んだ。東京からの人材派遣ができない中で、経験を積んだ市民インストラクターと個別面談し 3 名のコアメンバーを研究員に任命。研究費も用意した。個性とスキルに応じてプロデューサーの役割と責任を分けた。それぞれがプロデューサーである。プロデューサーシップという考え方を実践した。コロナパンデミックの影響によって「人づくり」が加速することになった。

③の地域リソースとの連携として「三鷹モデル」

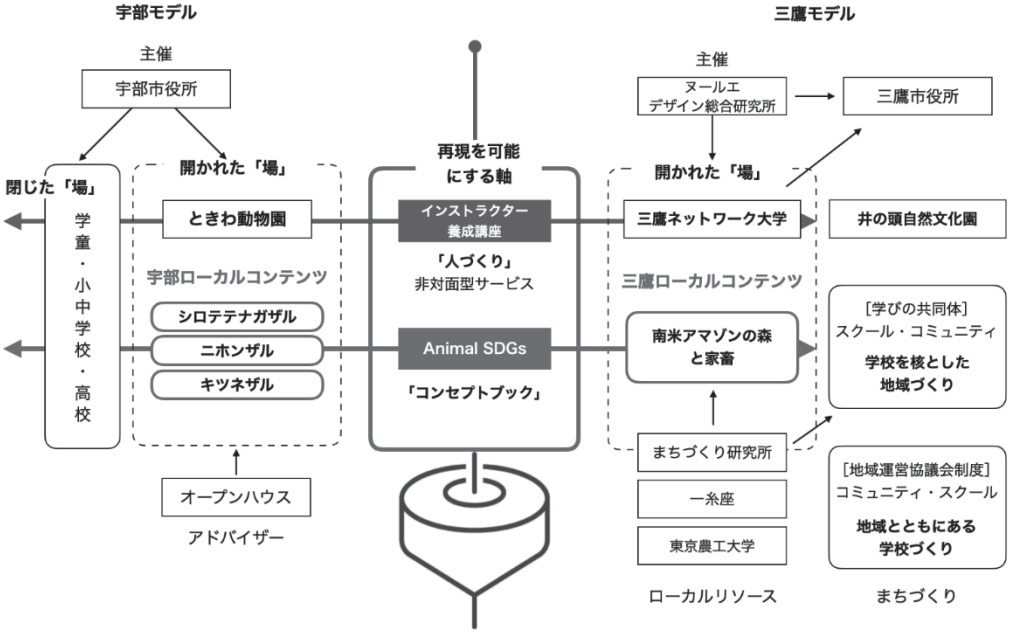


図 14　宇部モデルと三鷹モデルの構成と関係

では、三鷹ネットワーク大学のほか、東京農工大学や地域の人形劇団などと連携することができた。特にテーマに「家畜」を選択しコンセプトを深化できたのは東京農工大学朝岡研究室との出会いが大きい。

今後は、当初からイメージしていた井の頭自然文化園との連携を進めていきたい。その中で④グローバルな連携と⑤他地域への波及も進んでいくと思われる。

5.2　コンセプトの共有と深まり

今回、ローカルコンテンツを制作するにあたり、新たに参加するメンバーとコンセプトブック「Animal SDGs」を共有することでスムーズに進行することができた。

これまでの活動、目的やビジョンを関係各位、さらにこれから加わる関係者と共有していくために世界観の一致、コンセプトブックの必要性を感じて2021年、企画編集～デザイン、制作に着手したものである。制作予算には、経産省の「ものづくり・商業・サービス生産性向上促進補助金」の一部を活用した。

内容は、世界の子どもたちとの対話をとおして構想され、「地球は人間だけのものじゃない」という視点に立脚し、持続可能な開発目標（SDGs）に対する問いかけとなっている。コンセプトブックのタイトルは「Animal SDGs」とし、「SDGs」との違いを鮮明にした。図15がAnimal SDGsのデザインである。表6に動物が語るテーマと動物キャラクターのメッセージ一覧を示した。哺乳類、鳥類、魚類から昆虫などさまざまな生きものが人間たちの活動に対する疑問を語るという設定。1～16までは人間たちを突き放しているが、17では犬が、「わたしたちは人間と仕事をするのが好きなんです。人間たちは自分たちだけで解決しようとはせず、私たち動物と協力しあって、よりよい未来づくりをしていきましょう」と連携を呼びかける。最大の特徴は17のゴールに加える「SDGs18番未来の子どもたち」の提案（図16）である。「未来の社会を生きるのは、今のこどもたち。だからSDGs18ばん。こどもたちが大人になったとき、自然といっしょに楽しくくらせる社会をつくろう！」と呼びかける。本プロジェクトの総合アドバイザーである益田文和の未来ビジョンを本書を通して発信した。

コンセプトブックは今後の新たな展開において関係者との意識共有に欠かせないツールとなるだろう。

図15　Animal SDGsのデザイン

表 6 動物が語るテーマと動物キャラクターのメッセージ一覧

SDGs を語る動物		テーマ	動物かんきょう会議	キャラクターからのメッセージ
1	コンドル	貧しさをなくす	ワシのワッシ	金なんかみんなに配ってしまえばいいんだ！
2	町ねずみ	ひもじい思いをしないですむ	トラのトラジー	足りなきゃ分けろ。分ければ足りる
3	ニホンザル	健康と福祉	ウサギの DR.ラビ	体や心が弱った人を、皆で支え合うのです
4	カモ	質の良い教育	カンガルーのルーポ	知りたいこといっぱい。一生学びつづけるわ
5	皇帝ペンギン	女でも男でも平等に	タヌキのタック	だれも自分で選んで女や男に生まれたんじゃない
6	きんぎょ	きれいな水と衛生を	金魚のリュリュ	水はみんなものものだけど、だれのものでもない
7	シャチ	きれいなエネルギーが手に入る	パンダのダダ	きれいなエネルギーでクールに生きてみよう
8	ミツバチ	やりあいのある仕事と経済成長	ハリネズミのハリィ	どうせなら、やりあいのある仕事ができるといい
9	ミミズ	産業と革新と社会基盤	クマのターニャ	良い土壌には美しい花が咲き甘い実がなる
10	猫	不平等を減らす	のら猫のクロッチ	不公平は思いやりがなければ見えてこない
11	カラス	長く住みつづけられる町や社会	ビーバーのイーヴァ	安心して住める、居心地の良い町をつくろう
12	ウミガメ	使う責任　作る責任	イグアナのイーグとガーラ	責任を持って作り、責任を持って使うべし
13	牛	気候変動対策	ワニのワニール	人間は肉を食うな
14	アザラシ	水中の生きもの	アザラシのアーシィ	海は命のゆりかご、こわさないで
15	シロテテテナガザル	陸の生きもの	オランウータンのウータ	自然を壊してまでつくる価値なんかない
16	コアラ	平和の公正	雄鶏のジャン	自然を壊して平和でいられるはずがない
17	犬	協力して目標に向かう	オオカミのマガミ	それぞれの問題を一緒に解決しよう
18	ゾウ	人間へ	ゾウのゾウママ	今の自分のくらしをつづけるためだけに SDGs を利用してはいけません

SDGs18　未来の子どもたち
未来の社会を生きるのは、今のこどもたち。だから SDGs18 ばん。こどもたちが大人になったとき、自然といっしょに楽しくくらせる社会をつくろう！

KIDS AS FUTURE GENERATION
Those who live in the future society are the present's children. So, SDGs 18. Let's make societies where grown-up children can live happily together with nature.

図 16　SDGs18 番未来の子どもたち

5.3　次なる取り組みに向けて

以上のように、「三鷹モデル」再現実施の取り組みでは大きな進展を見ることができた。特に地域リソースとのつながりを得て Animal SDGs の問いかけをより強く表現できたことの意義は大きく、今後の取り組みをより効果的にするに違いない。

図 14 で示したように、「三鷹モデル」が始まり、これまで 1 枚羽だった取り組みが、2 枚羽になり、双方のリソースと個性が活かされあい、コマとなってクルクルと回転していくイメージができた。再現を可能にする軸となるのが「人づくり」と「コンセプトブック」であることがわかった。

2021 年度は、宇部市、三鷹市の他に、山口県内では美祢市、下関市、萩市、山口市、周南市。国内では静岡市、富士市、新潟市、横浜市、釧路市、弟子屈町、札幌市。海外ではタイ、モンゴル、カナダなどへの広がりを感じる手応えがあった。羽が 3、5、10 枚と増えていき、より高く、遠くまで飛べる渡鳥になっていけるか。そのために必要なのが「プロデューサー人材」の育成であるが、宇部モデルに取り組む人財（コアメンバー）が他の地域人財の見本となり、影響し合うことで、スピーディに自立型人財になっていく手応えは感じている。

本稿では、「三鷹モデル」としての十分な再現がまだできていないため、「動物かんきょう会議」が子どもたちにどのような効果をもたらすかといった成果面については検証の対象にすることができなかった。次年度以降の三鷹市での展開として、宇部市と相似の関係性を構築するためにも「井の頭自然文化園」をフィールドとする取り組みに着手し研究を発展させていきたい。

6　今後の展開

最後に、今後の「三鷹モデル」と教育サービスプラットホーム「Animal SDGs」がクリエイティブに発展するように、あるべき姿としての「I（ビッグアイ）」が「だれのためのデザインか」「だれと連携していくか」を確認しておきたい。また、国内と世界とのつながりを確認し、これからを構想をするために、図 17、図 18 を示す。

【Whom】だれのためのデザインか

テーマはすべて「共に生きる」であり、SDGs18「未来の子どもたち」のための「動物 × 子ども ×若者 × 誰でも」のアクションである。各地域の特徴を活かしたコンテンツづくりが全国ではじまっている。

① 子どもは、生きものや地球、世界の素晴らしさ、命のつながりを知ることができる
② 若者は、デザイン思考による具体的プランづくりができる
③ 市民は、インストラクターになって教育現場で活躍できる
④ 動物園は、飼育動物の生息地に思いを馳せる環境教育プログラムづくりができる
⑤ 企業は、サステナブルデザイン視点で、自社活動を見直したり新事業の発見ができる

⑥ 自治体は、「人づくり」「場づくり」をとおして次世代の人材育成を推進できる

⑦ 動物は、人間との関係性、生息環境が改善されていく

【With】だれと連携していくか

すべての参加者が進化していくことを目指し、命のつながりや生態系を知るために日本国内だけではく、世界の子どもたちと対話するための拠点づくりを進めていく。

① 動物園・水族館・科学館との連携

② 野生動物保全活動する NGO 団体、動物保護施設等との連携

③ 農林水産業、畜産業との連携、SDGs に取り組む企業との連携

④ 生物、環境、科学、教育、デザイン、社会、経済、先端技術等の専門家との連携

⑤ エンターテインメント（芝居・ダンス・音楽・VR・アニメーション等 表現）との連携

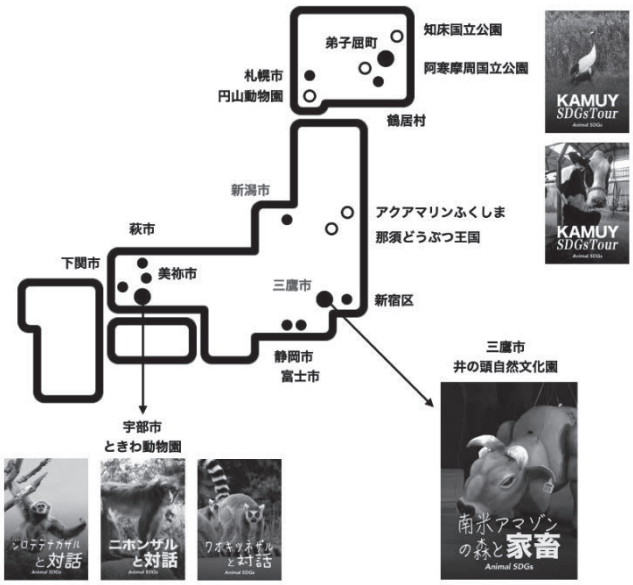


図 17　プロジェクトの実施地域と連携・連携計画中の動物園・国立公園

図 18　対話する動物の生息地と連携している世界の地域

［注］

1)　デザイン思考とは、デザイナーがデザインを考案する際に用いるプロセスを、ビジネス上の課題解決のために活用する考え方のこと。ユーザー視点に立ってサービスやプロダクトの本質的な課題・ニーズを発見し、ビジネス上の課題を解決するための思考法として、注目されている。

2)　清水義晴 1949 年、新潟市生まれ。「えにし屋」という屋号で全国のまちづくりやコミュニティー・ビジネス、人材育成などの仕事を手がけている。著書に『理念空間の創造』『集団創造化プログラム』（ともに博進堂）、対談に『ワークショップは宝の山』（PS 文庫）、『心価に着目したマネージメント』（博進堂）などがある。

3)　益田文和、オープンハウス代表。1970 年代から環境のことが気になり、さまざまな製品をデザインしながら、環境に配慮したエコデザインに取り組んできた。母校の東京造形大学でサステナブルデザインを教える一方、デザイン会社を東京から山口県のオフグリットの森に移し、自然の中に棲む動物としてデザインを考えたり、SDGs18 番を提唱したりしている。

［文献］

荒川和久、2019、「なぜか自己肯定感が低い日本の未婚男性の実像――「男らしさ規範」の意識の強さの差が関係？」、東洋経済オンライン、（2021 年 10 月取得、https://toyokeizai.net/articles/-/302836?page=2）

イアン・益田文和、2021、『動物が語る SDGs「Animal SDGs」コンセプトブック』ヌールエ

株式会社マイナビ、2021、「自己肯定感とは？高い人・低い人の特徴や注意すべきポイント」（2021 年 10 月取得、https://mynavi-agent.jp/womanwill/gwl/column/7681/）

清水義晴、2017、『日本型ファシリテーターのためのワークショップガイド』えにし屋

日本財団、2019、「「18 歳意識調査」第 20 回テーマ「国や社会に対する意識」（9 カ国調査）」（2021 年 10 月取得、https://www.nippon-foundation.or.jp/who/news/pr/2019/20191130-38555.html）

［参考文献］

朝岡幸彦　監修、2021 年、『こども環境学』新星出版社

イアンほか、2015、「World! The Animal Conference on the Environment ACTIVITY GUIDE」ヌールエ

マリルゥ＆イアン、2005、『絵本マガジンシリーズ　動物かんきょう会議』ヌールエ）

プロフィール

イアン　筒井（いあん つつい）

本名は筒井一郎。イアン（良い案）筒井として多方面で活動。1997 年からはじめた「動物かんきょう会議プロジェクト」の原作者＆総合プロデューサー。動物（目線）になって考えることで既成概念の枠をはずし、自由でクリエイティブな発想ができる人材を育成したいと考えている。目下、動物園と水族館、国立・国定公園をフィールドに、日本と世界の子どもたちが創発しあう「せかい！動物かんきょう会議」を展開している。2022 年、コンセプトブック「Animal SDGs／動物が語る SDGs」を発行した。株式会社ヌールエ デザイン総合研究所代表取締役。　https://nurue.com

---